

女子部合唱

I. はじめに

女子部は、中等科3学年の合唱と、今回初めての取り組みとして中等科・高等科6学年での合唱を行った。

中等科1年から高等科3年の6年間は心身ともに成長著しい時期である。男子ほど顕著ではないが女子にも変声期があり、中学生の透明感のある声質の時期を通して高校生は響きの豊かな大人の声に変化する。また、詩や音楽の解釈にも年齢による違いが大きく出ることから、今までは中等科と高等科に分かれてそれぞれの曲を合唱していた。

今回の音楽会では6学年で一緒に合唱することによって、中等科生と高等科生が互いに声を聴き合い影響し合いながら音楽を深め、女子部としてのハーモニーをホールに響かせてほしい、との指導者の願いがあった。

II. 中等科・高等科6学年

1. 選曲とそのねらい

演奏曲目には、岸田衿子作詞、横山潤子作曲「南の絵本」を選んだ。

「南の絵本」 岸田衿子

いそがなくたっていいんだよ
オリーブ畑の 一ぼん一ぼんの
オリーブの木が そう云っている
汽車に乗りおくれたら
ジブシイの横穴に 眠ってもいい
兎にも 馬にもなれなかったので
ろばは村に残って 荷物をはこんでいる
ゆっくり歩いて行けば
明日には間に合わなくても
来世の村に辿りつくだろう
葉書を出し忘れたら 歩いて届けてもいい
走っても 走っても オリーブ畑は
つきないのだから
いそがなくともいいんだよ
種をまく人のあるく速度で
あるいてゆけばいい

佐々木順子・永野 馨

合唱曲の分野で数多くの素晴らしい作品を生み出されている作曲家の横山潤子さんが、独特の世界観を表す曲を付けられた。長期間練習することで、この詩を深く味わいつつ、6学年のハーモニーを作り上げていけるのでは、との期待を込めての選曲であった。

2. 練習の過程

(1) 授業

どの学年も、5月末～6月頃からこの曲に取り組み始めた。基本的に3声で書かれている曲だが、ところによっては5声で響き合う箇所もあり、音程を確実にしていくことが難しかった。また、拍子が頻繁に変わるので拍子感を身に付けていくことも難しく、そこに困難を感じている生徒たちは、練習に身が入らないことが多々あった。加えて「詩の内容がピンと来ない」、「何を言いたいのかよくわからないので歌う気にならない」という声があった。

音楽の面では、音程を確実にすること、変わって行く拍子感に馴染むことができるよう、パート別練習にも多くの時間を費やした

また、普段の練習の時から各学年のコーラスリーダーたちが、皆の気持ちを練習に向けるように呼びかけたり、様々な工夫をしてくれた。

詩については国語科の先生方が、詩人岸田衿子さんの資料を作成し、授業で取り上げてくださった。

(2) 作曲家横山潤子さんをお迎えして

音楽会の1ヶ月ほど前に、この曲を作曲された横山潤子さんに学校にいらして授業をしていただけるようお願いした。そのための準備として、この曲に関して考えるポイントを示し、生徒全員への夏休みの課題とした。①歌詞の中の聖書に関係があると思われる言葉を抜き出すこと。②「いそがなくたっていいんだよ」という言葉は誰に対して言っているのか。③オリーブの木が「そう云っている」とあるが、オリーブは何と云っているのか。④「来世の村」とは何のことか。⑤この詩の中でいちばん好きな節はどこか。それはどうしてか。この5つを出題し、その上で曲の魅力を紹介する文を書いてもらい、

音楽会でこの曲を誰のために歌いたいのかも問いかけた。また、横山潤子さんに質問したいことや、曲について考えたことなどを自由に書いてもらった。

夏休み後に提出されたプリントには、生徒たちがこの曲を歌いながら感じたことや考えたことなど、多くのことが書かれていた。

例えば、

□「この曲を初めて聴いた時は、正直なところ歌いにくそうな曲だと思った。最初の頃は音程を取るだけでも難しかったが、何度も練習するうちに曲の良さに気づき、歌詞を改めて読み返して、自分の人生について考えさせられた」

□「歌詞のとおり音に優しくなったり強くなったり、リズム豊かなところがこの曲の魅力だと思う」

□「この曲を歌うたびに地元の景色が頭に浮かぶ。果てしなく続く一本道や1両しかない列車など。時間がゆっくり流れていて、列車は1時間半に一本しかない。その列車を待つ間、駅でゆっくり過ごしているおばあちゃんたちがいて、そのような情景をいつも想像しながら歌っている」

など、多くのことが書かれていた。

また、横山さんに聞いてみたいこととしてなどが出された。

□「作曲する時に心がけておられること、大切にしていることは何か？」

□「この詩のどこに魅力を感じられたのか？」

□「どうして1曲の中でこのように細かく拍子を変えたのか？7/8や4/2という拍子の存在にとっても驚いた」

□「この曲を聴く人に何を一番伝えたかったためにどのような思いを込めて作曲されたのか？」

□「『来世の村』について、私は未来の自分の住んでいるところなのかな、と思ったが、どのような意味があるのか？」

□「オリイブに込められた思いや意味は何か？」

□「私は、この曲調と雰囲気から『夢』という言葉が頭に浮かび、きっとそういう思いが入っている曲なのだと感じたが、横山先生は何をイメージして作曲されたのか？」

10月29日(月)の5、6時間目、高等科・中等科合わせて240名の女子部生が体操館に集まり、横山潤子さんをお迎えした。自分たちが練習している曲を作られた方のお話を直接伺う大変貴重な機会

となったこの時間は、最初こそ緊張気味だった生徒たちも、飾り気のないお人柄の横山さんのユーモアあふれるお話に共感したり笑ったりと、和やかな雰囲気ですべての授業が進んだ。横山さんは事前にお送りしておいた生徒たちからの質問にお答えになりつつ、この曲への思いを語ってくださいました。

詩のイメージが大分具体的に感じられるようになり、拍子や和声がどんどん変わっていくことの理由がわかったところで、今まで練習してきた「南の絵本」を横山さんに聴いていただき、その後、それぞれの箇所の感想やお考えを伺った。作曲家ならではの視点を存分に織り込み、故人である岸田衿子さんと電話で直接やりとりなさった時の話も交えながらのご指導を受け、生徒たちはそれに応えようと心を研ぎ澄ませてもう一度歌った。今までと違って、皆がこの曲を身近に感じ始めたことがはっきりとわかる演奏だった。横山さんは、生徒たちが詩の世界を懸命に表現しようとしたことをとても喜んでくださいました。

この授業を経て、生徒たちはさらに楽しんで「南の絵本」に取り組むようになった。

3. 本番での演奏

中等科1年から高等科3年まで240名が舞台に並び、高等科1年の中崎真歩さんのピアノ前奏に乗ってソプラノが「いそがなくたっていいんだよ」と歌い始めた時、皆が気持ちを揃えて、聴いてくださる方たちに語りかけたことを感じた。歌詞の中の景色の変化を辿りながらの約4分間、今までの練習で得たものを全て出し切ることができたように思う。

演奏を聴いてくださった横山さんからは「岸田衿子さんの詩のメッセージがまっすぐ素直に入ってきて、それが何より嬉しかったです。温かく、骨のある演奏でした。」との感想をいただいた。

生徒たちからは、「作曲された横山潤子さんからいろいろなお話を伺ったことで詩の世界がより具体的に感じられるようになり、「南の絵本」が好きになった」、「私は音楽が得意ではなかったが、横山さんが授業で、『ここは0.5ミリくらいの太さの青のフェルトペンで描くように歌ってみて。』、『ここはパステルグリーンの線で。』など、音楽を筆記具や色に例えてくださったことで歌いやすくなった。とても良い学びだったと思う。苦手だった音楽が少し好

きになれた」などの感想が多く寄せられた。

長い練習期間中、一人一人が「南の絵本」の詩の世界に身を置き、想像力を働かせて歌で表現し、6学年で協力して、聴いてくださる方たちに伝える喜びを体験することができた、真に貴重な学びの機会であった。

Ⅲ. 中等科3学年

1. 選曲とそのねらい

中等科の曲として選んだ曲は、フランスの作曲家、G. フォーレの「小ミサ曲」で、Ⅰ. キリエ Ⅱ. サンクトゥス Ⅲ. ベネディクトゥス Ⅳ. アニュス・デイの4つの部分から成っている。今回はⅠ.「キリエ」、Ⅱ.「サンクトゥス」の2曲を演奏することにした。

G. フォーレはロマン派の作曲家、オルガニストで、「レクイエム」は代表作の一つである。他にも「月の光」などの歌曲や室内楽曲、器楽曲などを数多く作曲している。「小ミサ曲」は全曲演奏しても約10分ほどの小規模な作品で、フォーレの特徴である得も言われぬ和声進行が大変美しく、芸術的に極めて優れた曲である。透明感のある中学生の声質に合う作品であり、お互いの声を聴きながら自分たちでハーモニーを作ることを学んでほしいとの指導者の思いから選んだ曲であった。

2. 練習の過程

1年と3年は週に2時間、2年は前期のみ1時間ずつ音楽の授業が組まれている。その他に3学年合同の時間を5、6、7月に1時間ずつ、10、11月には3時間ずつ取った。

3年生は歌うことが好きな人が多い学年であったこと、音楽会ででも下級生をリードしてほしいこともあり、4月早々にこの曲に取り組み始めた。2年生も歌が上手な学年だが、年齢的に少し中だるみの様子が見られ、練習がなかなか軌道に乗れずにいた。1年生は少し落ち着きがないクラスだったが、歌に関しては堂々と良い表情で歌える人が多く、「この難曲を音楽会で歌えるようになるだろうか？」という指導者側の心配は杞憂に終わりそうだと希望を持つことができた。

この曲は基本的には2声部で、わずかに3声部の部分があるのだが、和声進行が微妙で難しく、音程

を確実にすることに苦勞した。また、ラテン語の歌に初めて取り組む人がほとんどであったためか、歌詞は少なかったものの、発音に慣れるのに時間がかかった。

始めのうち、授業中はピアノの伴奏で練習していたが、6月頃からキーボードのオルガンの音色で伴奏した。フォーレ自身が伴奏楽器にオルガンを指定しており、音楽会では芸術劇場所有のポジティブオルガン（移動可能な小型のパイプオルガン）で伴奏することになっていたため、オルガンの音色に慣れてほしいとの意図もあった。

ラテン語に関しては読み方を繰り返し練習し、メロディに乗せて歌詞が自然に出てくるようになることを目指した。

1曲目の「キリエ」はSoli（少人数）と合唱の掛け合いの曲だったので、Soli パートの希望者を募ったところ、各学年とも10人以上の人が手を挙げた。やる気がある人が多くいることはとても喜ばしいことだが、合唱とのバランスを考えると3学年で10人くらいが望ましい人数だった。最終的に1、2年生が3人ずつ、3年生6人、計12人に絞った。全員がSoliと合唱パートのどちらも歌えるようにし、掛け合いのやり取りがスムーズに行えるようにした。

3. 本番での演奏

4年前に初等部で音楽会を経験した人以外は芸術劇場の大きな舞台に立つことは初めてであり、本番前の練習の時にステージに並んでみて、ホールの大きさと響きの良さにびっくりした人がほとんどだったと思う。その上、初めてポジティブオルガンの伴奏で歌うため緊張した人も多かったようだが、本番では皆、オルガンの音もしっかり集中して聴くことができていた。「キリエ」で12人のSoliが歌い出した時、まるで1人の人が歌っているかのようにブレスも声も揃っていた。それに続く合唱は、Soliに自然に応答していた。オルガンの前奏に乗って美しくハーモニーを作り、ホール一杯に声を響かせている生徒たちの底力を感じることができた。シンプルではあるが難しいこの曲を堂々と歌い切った生徒たちの得たものは大きかったと思う。

音楽会后、生徒たちからは「初めは宗教曲だし、ラテン語で意味もよくわからず、難しいなと思って

いましたが、練習していくうちにこの曲が大好きになり、教室でも皆でよく歌っていました。本番ではとても気持ちよく歌うことができました。次回はフォーレのもっと難しい曲を歌いたいです」、「この音楽会で感じた『歌いたい気持ち』をずっと忘れずにいたい」などの感想文が出された。

優れた作品に真摯に取り組み、お互いの声を聴き合ってハーモニーを作り出していく過程で、生徒たちは多くのものを学び取ったことと思う。

IV. 終わりに

4年に一度の音楽会は、前回の音楽会が終わってからの日々の歩みの上に成り立っている。生徒自身が様々な角度から曲に迫っていく中で得たものや、深い気付きを綴った多くの感想が生徒たちの成長を物語っている。この経験が今後、一人一人の中で大きく育ってくれることを心から期待している。

